

若者たちの「キャラ化」を統制するNPOの支援実践

～若者の居場所における「学び」の機能に着目して～

滝口 克典（東北公益文科大学大学院）

1. 問題の所在

90年代以降の日本型福祉国家／企業社会秩序の解体・再編とそれに連動した「戦後日本型青年期」の変容により、「漂流」を余儀なくされ「難民」化する若者たち。こうした現実を受け、若者政策／支援は、「正規就労」を「大人になる」ための要件とする社会的標準の移行モデルではなく、そこから外れて生きざるを得ない多くの若者たちが現実に採用可能な第二標準の移行モデルを構想し、それに沿って遂行されることを求められている[佐藤・平塚 2005；中西・高山 2009；乾 2010]。

そこで本研究では、社会的標準を前提としない移行期支援を展開している若者たちの共同実践の一例として、「若者の居場所」運営に携わるNPOの事例を取り上げ、そこでいかなる支援が構想／構築されているのかを記述し、それをもとに第二標準の移行支援の条件について考察する。

2. 調査概要

事例として取り上げるのは、山形市で活動する若者支援NPO「C」（2003年設立）が開設する「居場所／学びの場」である。筆者はこのNPOの共同代表を設立当初より務めている。

Cは、山形市郊外の住宅地に位置する一軒家を「フリースペース」として開放し、若者たちに交流の空間を提供している。2011年現在、毎週水曜から金曜、13時から17時まで開所しており、スタッフとしてNPO共同代表のA（30代女性）が常駐し、訪れる若者たちを受け入れる。

こうした「居場所づくり」がCの設立当初の目的だったが、利用する人びとのニーズの多様化に伴い、2007年頃より「学びの場づくり」をも並行して実施するようになり、現在は二つの柱で活動している。「学びの場」は、不定期に開催されるワークショップや読書会、自主ゼミなどさまざまで、テーマも「社会学」「地域文学」「NPO」「戦争」「若者の現在」「核と原発」など多岐に渡るが、共通しているのは参加型の形式が採られる点である。「学びの場」には、「フリースペース」の利用者の他、学習機会を求める（「フリースペース」とは接点のない）地域の若者たちが参加している。

筆者は、常勤スタッフであるAの補助要員として「フリースペース」での支援実践に関与しながら

ら「居場所」の参与観察を行ってきた。2009年からは「学びの場」の責任者兼ファシリテーターとして、「学びの場」の支援実践と参与観察とを並行して進めてきた。つまり、本研究は、筆者自身の活動実践を記述するアクションリサーチである。

3. 事例分析

（1）「キャラ型自己」を極めるという支援目標

Cでは、さまざまなニーズを抱える若者たちが「ひきこもり」「ニート」「フリーター」「発達障害」などといった特定の社会問題カテゴリーを介さずに受け入れられ、そのそれぞれに対して必要に応じた支援が行われている[滝口 2010]。若者たちの多様なニーズは、彼（女）の「世界の狭さ／浅さ」ゆえに生じた問題と翻訳され、その解消には「世界を広げ／深めていくこと」が必要とされる。この「狭さ／広さ」「浅さ／深さ」をはかる指標として用いられているのが「キャラ」である。

「キャラ」とは、支配的コードが不透明なコミュニケーション空間における相互行為の円滑化のための配役であり、流動化のリスクに対処するべく、2000年代の若者文化が編み出したコミュニケーション・サバイバルの一手法である[瀬沼 2009]。こうした「キャラ」を状況に応じて選択し使い分けていくような自己統治のありかた（状況志向的な多元的自己）を「キャラ型自己」という。「キャラ型自己」は、スペック（キャラの性能）とストック（キャラの数量）という二つの指標によって記述可能である[荻上 2008]。Cでは、この「キャラ型自己」としての習熟を重ねていくことが、移行過程であると捉えられている。状況に応じて選択できるキャラのストックを増やし、スペックを上げていくことが、流動化する社会の中で若者たちが頼りにできるよりましな社会空間や関係資源の獲得につながる、と考えられているためである。つまり、「狭さ／広さ」は社会的な足場（に支えられたキャラ）の多寡、また「浅さ／深さ」はそうした（キャラに力を与える）足場の質の高低と言い換え可能である。

このように、Cでは、若者たちの自己を「キャラ型自己」へと統制していくことが、支援実践を通じて追求されていた。それらは、「学びの場」と括られる一連の取り組みを通じて遂行される。

(2) 若者のキャラ化を促進する「学び」

Cの支援実践は、若者による若者支援であるため、支援する側もされる側も、程度の大小はあれど、基本的に同じ「狭さ／浅さ」というニーズを抱える存在だということになる。支援する側／される側のそうした対称性は、参加者の若者たちに「狭さ／浅さ」から抜け出すための「学び」への動機を醸成している。彼（女）らに「キツイ」と評価されるCの「学びの場」が、それでも成立しているのは、上記の動機づけがあるためである。

さて、Cでは、「学び」は「異文化圏に属する他者たちとの出会い」と捉えられている。つまりそれは、外部社会との接触を意味する。Cの「学びの場」では、地域で活動する実践者を招いたり、その実践現場を訪れたり、異文化を描いた作品に触れたり、実践者と一緒に企画に取り組んだりといった、若者たちが社会の多様な側面と出会えるような場が、複数、同時に提供されている。それらに参加することで、若者たちは、さまざまな文化圏や共同体との接点を獲得することができる。これが、キャラのストック増加＝「世界の広さ」へとつながっている。

一方で、そうした「学びの場」は、「居場所」の半・外部にあたる。そこは支援者の統制が利かない空間であるため、「支援者の失敗」も「参加者の成功」もともに生じうる。そうした場で、半・外部の人びとより与えられる承認は、「成功」が予期可能な支援空間にて与えられる不安定なそれよりも、より強く再帰的な自己を支えてくれるものになりうる〔荻野 2007〕。これが、キャラのスペック上昇＝「世界の深さ」へとつながっている。

(3) 地域のキャラ化を促進する「学び」

こうした多様な文化圏とのアクセスを保障しているのは、支援者の外部資源とのネットワークである。だが、Cでは、支援者が手にしている多様な外部資源がむき出しのまま若者たちに手渡されているわけではない。そこでは、支援者による両者の選択的な媒介が行われている。

Cでは、地域の各所に点在する「学び」に利用可能な関係資源のことを、「居場所的な場／人」と呼び、地域と「居場所」の中間地点として位置づけている。例えば、地域ユニオンや大学ゼミ（アート、社会学など）、NPO、文化系サークルなどである。地域とのコミュニケーションを図りやすくするこの操作を、地域のキャラ化と呼べるかもしれない。「居場所的」か否かの基準は、Cの掲げる「居場所」の定義——①安心できる、②仲間がいる、③自己表現できる、④場に関与できる——によっている。こうした操作を「社会の分類学」

と呼ぼう。支援者は、この「分類学」に基づき、地域のさまざまな資源を腑分けした上で、「居場所的」とされた文化圏や共同体に対し、「居場所」の若者たちを選択的に媒介する。つまり、Cにおける支援とは、若者たちに対する介入（若者のキャラ化）と同時に、彼（女）らが生きる地域に対する介入（地域のキャラ化）をも意味している。

4. 考察

Cの取り組みは、地域に実在する関係資源と若者たちとを出会わせる「学び」により、彼（女）らの自己の多元化とともに、それを支える地域の多元化を企図するものであった。

このアプローチの長所は、第一に、若者たちが自前で調達し蓄積してきた「社会技法」に接続する形で支援を行っている点である。若者たちは、自らの多元性を無理に縮減しなくともよいし、それどころかその複数性を武器にさえできる。

利点の第二は、支援資源の調達に関わる。それが若者たちに足場を与えてくれるものであれば、地域の資源はたとえどんなものであっても——娯楽や趣味の共同体であっても——若者支援の資源になりうる。この発想により、支援空間の敷居を現状よりもっと下げることが可能になる。

第三は、支援空間の設計そのものに関わる論点である。Cでは、終着点が明確な何らかの移行を目的とするのではなく、終わりが曖昧な「学び」を目的としている。そこには「卒業」が存在しない。これは、終わりなき「漂流」を続ける若者たちが抱える「居場所／学びの場」への常時接続のニーズに応えた結果である。

Cの支援実践は、一口で、支援空間の日常化と言えるかもしれない。そこにあるのは、社会的標準に基づいた従来の若者政策／支援が創出した敷居の高い支援空間への批判意識である。第二標準の移行期支援にとって重要なのは、より敷居の低い「親密な公共圏」または「公共的な親密圏」をいかに幅広く確保するかということなのである。

参考文献

- 乾彰夫、2010、『＜学校から仕事へ＞の変容と若者たち：個人化・アイデンティティ・コミュニティ』青木書店／荻上チキ、2008、『ネットいじめ：ウェブ社会と終わりのない「キャラ戦争」』PHP新書／荻野達史、2007、『相互行為儀礼と自己アイデンティティ：「ひきこもり」経験者支援施設でのフィールドワークから』『社会学評論』58(1)、2-20／佐藤洋作・平塚真樹、2005、『ニート・フリーターと学力』明石書店／瀬沼文彰、2009、『若い世代はなぜ「キャラ」化するのか』春日文庫／滝口克典、2010、『「居場所」はどのように達成されているか：民間フリースペースにおける非専門職スタッフの環境統制ワークに着目して』『日本教育社会学会大会発表要旨収録』62、6-7／中西新太郎＋高山智樹編、2009、『ノンエリート青年の社会空間：働くこと、生きること、＜大人になる＞ということ』青木書店